スポーツと芸術における美学的考察

The Aesthetical Study of Sports and Art

1K04B248-1

渡辺 尚人

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

副査 杉山千鶴先生

1 研究の動機・目的

筆者は趣味で、美術展などを鑑賞することがあるのだが、スポーツとは違った興奮や感情の変化を受けていた。しかし、ある美術展を鑑賞している時に、競馬を描いている絵画を発見したのである。

なぜスポーツを題材として描くのか。競馬の1シーンというスポーツの流れの出来事であり、しかも抽象画の手法で描かれていたのである。流れや時間経過が重要であるスポーツの1シーンを切り取って、描くことでどこに「美」を見出しているのか、何を表現したかったのかなど疑問が湧いた。

本研究ではスポーツと芸術の関係性を見ていくことで、スポーツにおける「美」とはなにか、スポーツは芸術が表現する「美」の対象になりうるのか、そしてスポーツは芸術なのかを明らかにしていきたい。その際、「美」を研究するので、美学を避けては通れないだろう。よってスポーツと芸術の関係性を美学の視点から考察していきたい。

2 各章の構成

第1章では、スポーツ、芸術、美学の定義を考えていきたい。スポーツの根源的発生を論じているヨハン・ホイジンガとロジェ・カイヨワの2人の考えでは、スポーツは元々遊戯、プレイから生まれたものである。人間は遊戯する存在であり、その一環としてスポーツがある。しかし2人の論では物質的利害性や富や財産を生み出すことをプレイの世界の外に置いている。つまりこれでは現在のプロスポーツを考えることが出来ない。そこでアレン・グットマンのスポーツの分類を用いることで、競争的なスポーツも考えることが出来るので、グットマンの分類を基に考えていきたい。

第2章では、スポーツと芸術が結びついたように思えるオリンピックの芸術競技を紹介する。1948年のロンドンオリンピックまではスポーツの競技と一緒に、芸

術競技というものが開催されていた。クーベルタンの思想であった「精神と身体統合」において、精神に当たるのが芸術であった。現在は競技ではないが文化プログラムとして芸術展示は行われている。では何故競技として廃止になったのか、スポーツと芸術の融合は不可能だったのか。この問題を芸術競技の歴史を追っていくことで明らかにし、問題点について考察を加えたい。

第3章では、スポーツにおける「美」に焦点を当てる。美は対象があつて、そこに主観が加わって初めて美的体験となる。これはスポーツを観戦して体験することはもちろん、スポーツ実践者にも体験させる構造を持っている。スポーツの美を考察することで、芸術との共通点、相違点を明らかにしたい。

第4章では、「スポーツは芸術である」という考えの賛否両論を見ていく。賛成派としてギアーツ著『バリ島の闘鶏』を、否定派として「ワーツーベスト論争」を見る。組織化されている中で動物同士ではあるが競争している闘鶏を観戦する構造は、スポーツと呼べるものであり、そこには芸術が何かを表現するように、「不安」が表現されているので、スポーツは芸術であるとギアーツは主張している。「ワーツーベスト論争」では、スポーツ、芸術、美の構造を両者の違いを検討する。

終章として、各章から結論づける。筆者の考えでは、「スポーツは芸術である」とは言い切れず、むしろ芸術ではない、芸術の中にいれて考えるのではなく、スポーツ固有の美を見出すことが出来ると思う。芸術と非常に似ている表現を持つスポーツもあるが、それは美が芸術とスポーツに横たわっているからであり、スポーツ＝芸術ではないと考える。